
私の国

小林 太陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の国

【Nコード】

N2628P

【作者名】

小林 太陽

【あらすじ】

私の故郷。魯迅『故郷』や仏典に似せて。

私の国の紹介

私はこの国に住む男性である。

私の国はどこまでも真っ白で、どこまでもどこまでも続いている。そこには終わりというものがなく、始まりというものもない。

私の国には国境というものはない。しかし外から訪れた者は自分を外国人だと思っていて留まる者はあまりいない。

私の国には戦争というものはない。難民の外国の方たちと、ときどき訪れてくる疲れた友人たちだけがその国外での戦争の話をしてくれるだけである。

私の国には労働というものはない。子供たちは毎日遊んでいて、大人たちはみんな自分の好きなことをして、その天職一筋に子供たちや外国の方たちのお世話をしているだけである。この国の人たちはみな何かしらの専門職を持っており、それを聖職者のような方たちが先導している。

私の国には恋というものはない。子供たちだけがそれに近いことをして遊んでいるが、大人たちは皆ウィットとユーモアのある会話をし、愛を紡ぎ合い、分かち合い、穏やかに暮らしている。

私の国には病気というものはない。この国に来た外国の方たちは始め自分が病気をしていることに気づかされるが、子供たちや仕事をする大人たちの献身的な世話にて次第に癒されてゆく者がほとんどである。

私の国には車というものはない。この国の人たちは思ったところまで飛んで行ける。ゆっくりと飛んでゆく者もいれば、瞬間移動のようにふっと消えて移動してゆく者もいる。それがスタンダードな移動方法である。この国には空間と時間があるようでないのである。

私の国には色がついていない。私の国の建物や自然はすべて真っ白である。正確にいうならばパステルカラーの様に様々な色が輝いて

いて真っ白に見えるのである。

私の国には天気というものが無い。この国はいつも天候に変化が無く、それは人工的な環境を思わせるものである。しかし空には太陽のようなものがさんさんと輝いている。

私の国には食べ物や住まいがない。この国の人たちは食べようとさえ食べられるし、住もうと思えば住めるけども、それをしなくても生活ができるので、とくにこだわらない。ただ何かしらの住まいになるものを持っている人は多い。住まいは個人的な休養をするためやお祈りをするために用意されている。

私の国には悲しみはない。この国の人たちは悲しみというものをこの国にある学校で習ったので知っているけども、悲しむことはない。みなそれは遠い過去のことのような気がしていているので、みな前を向いて毎日毎日の生活をよりよいものにしてしている。

私の国にはゴミというものが無い。この国はゴミを捨てるとしばらくすると空気に変わってしまうからゴミがない。また、不要なものは必要な人に届くようになっていいるから、ゴミが出ることもほとんどない。

私の国には動物というものがいない。正確にいうならば、人の言葉を喋ったり笑ったりする動物の姿をした生き物がある。彼らはみな子供の様な存在で、人々と共に暮らしていて、子供たちとよく遊んでいる。住まいで飼っている人もいるが、多くの人はそれを飼ってはいない。

私の国には形というものが無い人もいる。彼らは光の玉のような感じでよく人々の元へやってくる。人々はその人にいろいろ教えてもらって満足そうである。

私の国にはお金というものが無い。この国に住む若者はお金というものをみな知らない。つい最近まで学校で教えていたらしいのけども、教えなくなつたそうである。年配の方は教えてもらった記憶がわずかに残っている程度であり、外国の方がたまにお金の話をするくらいである。

私の国には純粹な影というものが無い。この国には太陽のようなものが空にあるのだけでも、建物も人もみんな光っているので、影のようなものが出来ることが無い。あるのは光の濃淡だけである。私の国には携帯電話やテレビ、インターネットというものが無い。この国の住人は一瞬にして会話したい相手の元へゆくことが出来るし、会わなくてもテレパシーで会話できるので、そういう電話やインターネットのようなものはない。テレビみたいなものはあるけども、多くの人はテレパシーで映像も受信して見ている。

私の国にはスポーツというものが無い。この国の住人は学校でスポーツなるものを知識として習うが、それがどういうものなのかというをよく把握できていない。人々は身体というものは確かに持っていることが多いけども、肉体という概念が存在しないので、スポーツをするということが実感としてよく分からないし興味がない。私の国には警察というものが無い。この国の住人たちは犯罪者というものを学校で習うことがなくて、困っている人というものが居るということは学校で習う。なので外国から来たと述べられて困っている人には、みな手を差し伸べてお互いに助け合っている。

私の国には夫婦というものが基本的にない。この国では夫婦なる感覚というもの、異性を感じる感覚はよく分かるけども、夫婦というものが基本的に存在しない。夫婦の形態を持って住まいで共に暮らしている人は実に少数派である。この国の人達はいろんな異性と付き合い、お互いに与えあって、調和に満ちたものになっているのである。子供たちは夫婦の支配所有下にあるものではなく、いろんな人々によって育てられるのである。

私はこのような国で、毎日仕事の研究にいそしんでいる。

私はこの国に住む聖職者の一人で、友人には科学者や芸術家などが沢山いるのである。

私の日常（前書き）

住んでる家、妻、仕事、周りの人々について。

私の日常

ここでは私の日常を紹介する。

私の自宅は太陽の近くにあつて、そこは真っ白なカイトが青い空に瞬く様にして大きな屋根となり、中にはらせん階段と大きな鏡が目立ち、白い布のようなものが天上から幾つもぶら下がっている。壁の色は全て白で、二階にある私の書斎だけはログハウスの様な木目調に今はしてある。最近は何の木もぬくもりが恋しいので、そのようにしてある。

私が食事を取ることはほぼ無いので台所というものは存在しないが、初めてお客さんが来られたときは、豪華な料理を用意することもあつた。用意するといつてもこの世界では念じただけで出来上がるのだから、全く苦労は要さない。それに私の本分は、芸術家でもあるため、そのような豪華なディナーなどを創りだすことは容易い。

それで風呂場は二つある。何故か判らないが二つある。何故なんだろうか？

私はこの家に基本的に一人で住んでいる。妻なるものは居るのだが、芸術家の妻は忙しく彼女も自分の本業を行うために家で二人ですつと一緒に居ることはあまりない。どちらかというとな彼女は妻というよりも絆で結ばれた親友のような感覚に近く、彼女と出会った頃は私に自前の曲を奏でて楽しませてくれたが、今ではただ睦言を語り合う関係に近い。

語り合うと言っても、殆どお互いに喋ることはない。二人で一緒にいるだけで、阿吽の呼吸で分かち合つて会話している感じである。妻は私が他の女性と親しげにしていると妬いてしまい困らせたことも昔はあつたが、今ではそんなことも無い。しかし私からすれば妻は色々な男性と交流しているので妬いてもいいのだらうが、私は特

別そういう気持ちを抱いたことが無かったのは私が男性だったからかもしれない。いや私もきつと妬いたことがある。忘れていただけだったのだろう。だがとにかく今の私たちは、男性とか女性とかそういう枠組みの中に納まることの無い、性別を乗り越えた自由な関係だと信じている。

私の日課は自然を芸術的に研究することで、基本的に通常時でもお祈りの意識状態で活動している。学問の練磨に関してはそれなりに行って来て、私の今の道は祈禱の力の練磨であることが多い。また私はときに学問の道を歩んでこられる方々には何かヒントなるものを与える役に徹している。私の友人には科学者も居るのだが、私は基本的に芸術の視点から、それらを与えるお手伝いをさせていただいている。使命は、芸術の道を振興させてゆくことであり、祈禱をする聖職者一端でありながらも、芸術家としての活動をおざなりにするわけにはいかない。

本格的に祈禱をするときは、書斎兼祈禱の部屋である私の部屋にて入神し、ただ私は無になつて、夢想無念でお祈りを捧げる。地上には、御真言やら祝詞やらいろんな方法があるようだが、私はそういう形にこだわつた祈禱を行っていない。ただ純粹に“救済のため”にお祈りを行う。私の先輩たちは、お祈りを通して私の内とも外つかぬ目前に現れることもあり、彼らは皆立派な聖職者である。彼らは主に救済の道を歩く者であり、現場に降りて行って、地獄と呼ばれる世界に飛び込んで幾多の人々の救護にあたっている。私は半端者なので彼ら先輩たちの様な仕事するには力量不足で出来かねている。何度か現場へ出たこともあるけれども、私にはまだそれがやっぱり上手に出来かねる。それはとても難しい仕事だからだ。

家から出かけて、私は空を飛び、眼下に広がる街へ出ることもある。そこではみんな幸せそうに暮らしていて、楽しそうである。私は芸術を通して彼らと触れ合う。何か新しいものを作つてはそれを持つ

て行って、発表してもらいまた家に帰ってくる。私もいろいろとそこではお腹いっぱいになるほど御馳走してもらったりして帰ってくることも多い。

…さて、今日も仕事だ。何かをするには研究が欠かせないのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2628p/>

私の国

2011年10月3日19時00分発行